

令和七年度
名寄市立大学
一般選抜 前期日程

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、HBの黒鉛筆またはシャープペンシル（シャープペンシルの芯はケースから取り出したもの）、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ハンカチ、ティッシュペーパー（袋・箱から取り出したもの）以外、不要な物は置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は静かに手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

一般に、知識を増していくやり方は、大きく分けて二つある。料理を例にとつていうと、ひとつは、他人の話を聞いたり、料理に関する本を読んだりして、他者の見出した知識を摂取する（自分のものにする）、という形のものである。これは、一見したところ「記憶」にすぎないように見えるが、実はそうではない。人間は、その意味をある程度理解することなしに、手続きをそのままそっくり覚えこむことはきわめて困難だし、また覚えたとしても、それだけでは応用がきかない。他人の調理法に関する知識を摂取する、といっても、その意味を一応は理解していなくてはならないのだ。たとえば、シチューなどの煮込み料理では、なぜはじめに肉をいためておくのか、そのわけを理解していれば忘れにくいし、応用もきくだろう。

知識を増していくもうひとつのやり方は、みずから新しい料理ないしは調理法を工夫する、というものである。つまり問題解決による新しい知識の創造という形をとる。

ところが、他人のもつ知識を摂取するにせよ、問題解決により新しく知識を創造するにせよ、その領域に関する豊かで、よく構造化された既有知識なしには簡単にはいかない。

具体的な事実のほうはあとでくわしく見るとして、原理的にいっても、意味を理解するというのは、新しく与えられた情報と、今までもっていた知識との間に整合的な関係を見つけることである。今まで知っていたことのひとつのバリエーションとして新しい情報が位置づけられる場合もあるし、今まで知っていたことから、なるほどそれはうまくいきそうだった形で、新しく与えられた情報の正当化が行われる場合もあるだろう。しかし、いずれにせよ、与えられた情報を意味あるもの、「たしかにそうだ！」と思えるものにしてくれるのは、認知的制約として働く既有知識なのである。したがって、他人の持つ知識を効果的に摂取するには、もっている知識が豊かで、しかも場合に応じて速やかにとり出せることが必要になる。

問題解決による新しい知識の創造のほうはどうか。ここでも既有知識の働きが非常に重要だというのが、心理学のみならず、計算機に人間並みの知能をもたせたいと努力してきた人工知能の研究者たちが一致しているところである。われわれが取り組む問題らしい問題というのは、ほとんどの場合、あとでいわれれば、なるほどそうかと思うような隠された制約条件があったりするし、問題を、与えられたままの形でなく解きやすい形に変換するための知識がないと手がつけられない、といったことも少なくないからで

ある。

このように考えると、エキスパート、すなわちその分野に関して豊かでもよく構造化された知識をもっている人は、同一の状況におかれていたときでさえ、その分野では、初心者に比べ効果的に学ぶことができ、知識をますます豊富にしていくことが可能だということになる。

加えて、エキスパートは、自分の得意とする分野についてたえず有能さを増していきたいという強い動機づけをもっていることが多いから、その分野での知識の追求を他のことに優先させる傾向がある。いわば領域固有の高い能動性をもっている。この結果として、エキスパートはますますエキスパートになっていく。彼らはその分野では、たしかに有能な学び手だ、ということになるのである。

日常生活においては、人は誰でもなにかのエキスパートになることができる。いや、逆にいうと、くり返しやってもエキスパートになれないようなことは、大体あきらめて他の人に肩代わりしてもらうことが多いのではなからうか。その意味で人びとが日常生活でくり返し取り組んでいるのは、その人が得意とする分野のことであるのが普通だろう。

日常生活で人びとが有能にふるまい、しかも効果的に学習しているひとつの理由は、彼らが主に、もともと自分が熟達している分野について、いつそう学ぼうとするからである。この意味で日常生活は、かつての「共通一次」のように、何もかも一通りできなくてはならないといった学習場面とははなはだしく異なる。好き嫌いや、得意・不得意と関係なしに、与えられたことについて学ばなければならないという事態ではないのである。

（『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』稲垣佳世子・波多野誼余夫著 中公新書
一九八九年より）

問 「日常生活においては、人は誰でもなにかのエキスパートになることができる」について、あなたの考えを八〇〇字以上一〇〇〇字以内で述べなさい。